

華岡青洲が煎じ薬「通仙散」を使い、世界初の全身麻酔で、乳がん手術を行ったのが1804年。それから約百年遅れて、アメリカの外科医ハルステッドが「定型的乳房切除術」を確立しました。

「疑わしきは切除」という考えのもと、乳房はもちろん、胸の筋肉、わきの下のリンパ節も全て取り除くという手術でした。胸が洗濯板のようになる上、腕がむくんだり、感覚が鈍ったりといった後遺症がつきものでしたが、治癒率は格段に向上しました。

そして、この「ハルステッド手術」が、長く乳がんの標準治療として行われてきました。私が医者になった36年前（1985年）も、日本では、

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

青洲の乳房温存のがん手術

使った手術を行っただけでなく、乳房温存手術のパイオニアでもありました。

青洲が生きた幕末の日本では、男性の睾丸と並んで、乳房は女性の急所で、取ってしまえば命に関わると信じられており、手術などもってのほかでした。

しかし、青洲は、村の農家の女性が暴れ牛の角で乳房を

ます。さらに、妹の於勝が乳がんで亡くなったことも、この治療に対する思いを強くさせたに違いありません。

全国2000を超えてお寺の過去帳をもとに、青洲の手術を受けた乳がん患者全152人中33名の死亡日を明らかにした調査があります。手術後の生存期間は最短8日、最長41年で、平均すると2〜3年というものでした。当時のことですから、多くの患者は進行した乳がんだったはずで、それを考えると、青洲の手術がいかに素晴らしものだったか分かります。日本が世界に誇る偉業です。

次回は乳がんの放射線治療について取り上げます。

（東京大学特任教授）

この手術が全盛でした。ちなみに、欧米では、この時期、すでに「乳房温存療法」が主流でしたから、日本は随分遅れていたことになります。しかし、青洲が行った乳がん

んの手術は、自ら考案したメスやハサミを使って、がんの部分だけを乳房から摘出するというもので、現在の「乳房部分切除術」に相当します。青洲は、世界初の全身麻酔を

切り裂かれた後も、元気に暮らしていることを目にします。また、「解体新書」で有名な蘭学医の杉田玄白を通じて、西洋では乳がんの切除手術が行われていることも知り